

# 經濟論叢

第109卷 第1号

## 出口勇藏教授記念號

---

|                      |      |     |
|----------------------|------|-----|
| 献 辞                  | 大野英二 |     |
| 社会科学の「科学性」           | 河野健二 | 1   |
| 貨幣価値をめぐるリカードとマルクス    | 行沢健三 | 18  |
| 資本と分配の理論について         | 菱山泉  | 41  |
| ルカーチとハンガリア・ソヴィエト共和国  | 平井俊彦 | 64  |
| W. バジョットのアダム・スミス論    | 岸田理  | 85  |
| 実質費用論と機会費用論          | 高橋正立 | 108 |
| B. B. ベルビーフレロフスキー論序説 | 松岡保  | 131 |
| 晩年のマルクス覚え書           | 田中真晴 | 150 |

出口勇藏 教授 略歴・著作目録

---

昭和47年1月

京 都 大 学 經 濟 學 會

## ルカーチとハンガリア・

## ソヴィエト共和国

平井俊彦

## I プロレタリア革命のプロローグ

1918年10月の末、大戦のもたらした食糧危機がハンガリア国内各地を襲い、その他の生活物資も欠乏して、ブダペストの街には反戦デモやストライキが相ついでおこった。長い間、ハンガリアを支配してきたハプスブルク専制体制も、国王カール5世の退位でついに崩壊した。11月1日、大戦中から一貫して議会で反戦的立場をとったミハーイ・カーロイ伯 Mihály Károlyi を首班として、議会反対派、オスカル・ヤーシ Oskár Jászi の指導する議会外ブルジョワ急進派、ジグモント・クンフィ Zsigmond Kunfi とエルネ・ギャラミ Ernő Garami の率いる社会民主党、以上三つのグループは、ブルジョワ連立内閣を作った。ハンガリアにおけるブルジョワ民主主義革命がこれであって、この「秋ばら革命」 Autumn Rose Revolution は、血を流さずに遂行されたのであった<sup>1)</sup>。

カーロイ政権は11月13日、連合国と休戦協定を結び、ハンガリア旧領土の約半分を割譲するとともに、他方で国内政治体制の民主化を進め、大土地所有制を規制し、利潤分配の適正化を図ろうとした。かねて、オスカル・ヤーシがいただいていたハンガリアの近代化構想が、これであった。だが、革命的情勢のなかでは、一般に政治力学によって状況は動いていく。では、このブルジョ

1) この論文は、季刊『社会思想』第1巻第4号(1971年12月)所収の小論「ルカーチとハンガリア革命」の続稿である。先の論文は、ハンガリア革命のうち、1918年ブルジョワ革命を中心にとりあつたが、小論はブルジョワ革命からプロレタリア革命とその崩壊までの時期をとりあつかう。

ワ革命の矛盾はなんであるか。何よりも、矛盾は社会主義者の側に生まれた。すなわち、社会民主党の執行部はカーロイ政権のなかでブルジョワ改良主義政策に妥協していったのに対し、その下部層をはじめ急進左翼諸派は不信をいだき、かれら独自の社会主義革命の構想を描いた。社会民主党左派、独立社会民主主義グループ、技術家社会主義グループ、革命的な社会主義グループがこれであって、独立社会民主主義者たちは『ハンガリア・プロレタリア宣言』を発表して「純粹社会主義共和国の樹立」をスローガンに掲げ、一挙にブルジョワ社会をとびこえて、完全な共産主義社会の実現を要求した。「なんらの特権も搾取もなく、主人も召使もなく、各人が労働者であって、ただ一つ雇用者がある」とすれば、市民の共同体たる国家が存在するだけである！」<sup>2)</sup>だが、これら革命的左翼はブダペスト兵士評議会の一部に足場をもっていたにすぎず、社会民主党内部はもとより労働者評議会からも閉め出され、その運動は混迷していた。にもかかわらず、こうした革命的左翼は、ガリレオ・サークルなど学生運動とあいまって、自発的な社会主義運動を担っていたのであって、これら多様な運動があったればこそ、共産党が創設されたのちも、これらがハンガリア社会主義の運命と性格を決定づけたといえよう。ことに、インテリゲンチャー運動やサンジカリズム的傾向が強かったことは、革命の挫折を結果するとともに、ひいては逆に、のちの56年ハンガリア事件を生み出す要因となったといえよう。だから、18-9年革命は現代ハンガリアの、ことに東欧におけるハンガリアの個性をも規定しているのである。

ベーラ・クン Béla Kun がロシア革命の教訓を身につけて数人の同志とともにハンガリアに帰国したのは、ちょうどこの時期においてであった<sup>3)</sup>。クンは「ハンガリアのケレンスキー体制はやがてロシアと同一の運命を辿り、……日和見

2) Gabor (ed.), *A Magyar Munkásmozgalom Törkénetének Válogatott Dokumentumai* [Selected Documents from the History of the Hungarian Workers' Movement], Vol. 5, pp. 310-311.

3) Rudorff L. Tökés, *Béla Kun and the Hungarian Soviet Republic, The Origins and Role of the Communist Party of Hungary in the Revolutions of 1918-1919*, New York and London, 1967, p. 95. 小論でのハンガリア革命史に関する資料については、本書の叙述に負うところが多い。

主義者たちはかれらの十月革命に出会えよう」と言明して、プロレタリア革命へと革命諸派を結集した<sup>4)</sup>。11月24日、クンをはじめラビノヴィチ Robinovits, シェイドラー Seidler, バントス Vántus, ポール Por, ナーサーシ Nánassy らのハンガリア・ボルシェヴィキ, バーゴー Vágó, サントー Szántó, ラースロー László, ルダシュ Rudas らの社会民主党左派, 独立社会民主主義者ショムロー Somló, 革命的社會民主主義者コルヴィン Korvin, 技術家社会主義者ヘヴェシ<sup>グエレス・ウジャーク</sup> Hevesi らが中央委員となって、ハンガリア共産党を創設し、機関誌『赤旗』<sup>ネープサアバ</sup> *Vörös Ujság* を創刊した。その創刊号は、社会民主党の『人民の声』紙 *Népszava* に対決して、プロレタリア革命への任務をはっきり打ち出した。「われわれはハンガリア・プロレタリアートの階級意識を堅持したい。……労働者を階級闘争へと組織して、故意に抑圧された国際的な階級連帯性の感情を目覚めさせ、国際的プロレタリア革命闘争へと立ち上がらせるだろう。」<sup>5)</sup>

こうした雰囲気の中で、翌12月にルカーチは「精神家たち」の危機意識をばねとして、というよりはむしろブルジョワ・インテリゲンチヤーを脱皮して、プロレタリア解放闘争の戦列に加わった<sup>6)</sup>。「精神家たち」のうち、ルカーチと行動を共にしたのは、ベーラ・バラージュ Béla Balázs, ベーラ・フォガラシ Béla Fogarasi およびブルガールであり、現実政治に嫌悪感をいだいていたカール・マンハイムは、ハウザー、ヒュレブ、レスナイとともに文化革新の立場にとどまった。「精神科学的自由学院」で文化運動をすすめてきたグループは、ルカーチの入党をきっかけに二つの道を辿ることになった。神秘主義的ロマン主義に傾倒していたルカーチが、なぜ入党したかは、「精神家たち」には謎で

4) Béla Kun, "Hungarian Kerenskyism", *Pravda*, Oct. 31, Nov. 1, 1918.

5) "For Class Struggle", *Vörös Ujság*, No. 1, Dec. 7, 1918.

6) 革命過程における知識人の在り方と自己変革の問題を、正面から取り上げたのは、池田浩士氏の注目すべき論文「合法と非合法の弁証法——初期ルカーチの革命論1」(『共和国』第2号, 1969年2月, 16ページ以下)である。わたしは、この小論のなかで、ルカーチがハンガリア革命の推移のなかで、どのように自らの思想を作りかえていくかというプロセスに注目したい。『戦術と倫理』のなかの一節「精神的指導の問題と精神労働者」は、精神労働者を一定の生産関係に組み入れるとともに、階級意識の意識化(対自化)の問題を提起した重要な論文である。

あり、「サウロガー転してパウロになった」驚ろきであったが<sup>7)</sup>、すでに『小説の理論』のなかで現代文化の悲劇である人間と世界、形式と内容の間の果てしなき矛盾を克服する主体を、まさしくプロレタリアートの階級意識に求めた、と私は考える。そして、このことによって始めて、ルカーチは単なるロマン主義的文化主義、さらに左翼文化主義とも異なって弁証法的マルクス主義の立場に立ちうるとともに、思想的出发点から一貫している「魂を充たす社会主義」という普遍的原理を実現しようとしたのであった<sup>8)</sup>。

この新しい党は、「すべての権力を、労働者、兵士、貧農代表の評議会へ！」なるスローガンのもとに、各職場や農村および大学で組織活動を開始した。創立に加わらなかったルカーチは、中央委員とはならなかったけれども、党宣伝部委員として精力的に行動した。社会民主党左派から加わったサーント・トルダシュ、それに社会主義哲学者シャンドル・ヴァルヤシュ Sándor Varjas は、第2インターナショナルの歴史を講義し、かれらの戦争犯罪を明らかにしたし、19年1月に党講師陣に加わったイエネ・ヴァルガ Jenő Varga は社会主義下での労働者による工場管理、農業問題などを説いた<sup>9)</sup>。他方、ルカーチは文化革命主義の立場から、フォガラシとともに、国際的プロレタリア革命の倫理的性格を講義したが、これの具体的内容は『戦術と倫理』の中でうかがうことができるであろう。わたしはこの事情を別稿で詳しく説明したから、ここで重要な論点だけを簡潔にのべよう。かれは、プロレタリアートが人類の究極目標を实

7) David Kettler, *Culture and Revolution—Intellectuals in the Hungarian Revolutions of 1918-19*, Luchterhand, 1967, 徳永恂訳「若きルカーチとハンガリー革命」、『ルカーチ研究』白水社, 248ページ。

8) 小論「ルカーチとハンガリア革命」、『社会思想』第1巻第4号, 160ページ。なお、この時期にルカーチとマソハイムがはっきり決裂したことについては、ルカーチが『戦術と倫理』のなかで、厳しく次のように批判していることから明らかである。「精神的指導の使命は、なんらかの〈精神的な階級〉の特権でも、あるいはなんらかの〈階級を超越して漂う〉 über den Klassen schwebenden 思考の産物でもありえない。社会を解放するというこの使命は、プロレタリアートの世界的な役割なのであり、ただプロレタリアートの階級意識によってのみ、人類のたどるこの道を認識し理解するにいたることができ、ひいては〈精神的指導〉にまでいたることが可能となるのだ。」Georg Lukács, *Taktik und Ethik* (Taktika és ethika, Budapest, 1919), in *Schriften zur Ideologie und Politik*, Ausgewählt u. eingeleitet von Peter Ludz, S. 19, 池田浩士訳編『ルカーチ初期著作集, 政治編1』34ページ。

9) Tökés, *ibid.*, p. 107-8.

現すべき歴史哲学の課題を担っていることを強調し、文化革命をプロレタリア革命に期待したことである。「プロレタリアートの階級闘争の意味は、……従来のどの社会とも異なる一つの社会秩序、もはやどんな抑圧者も、どんな被抑圧者もない一つの社会秩序が、生まれてくるということだ。人間の尊厳をはずかしめる経済的従属の時代が終わりを告げることによって、——マルクスの言っているように——経済的な力の盲目的な威力は打ち破られ、より高い、適切な、人間の尊厳にふさわしい威力が、それにとって代わるにちがいない。」<sup>10)</sup>ここに、すでに物質的側面の軽視がルカーチから経済問題を切りはなした抽象的要請を生みだすことになる、とともに、精神の優位する文化革命の構想の芽生えをよみとることができるはずである。

ルカーチらの活動は連日連夜、精力的に続けられた。だが、カーロイ政権に対する国民の信頼は大きく、また、社会民主党がブダペスト労働者評議会を押えていたために、プロレタリア革命の展望は、2月中旬まできわめて暗かった。ことに文化主義的なルカーチの倫理的な要請や急進的サンジカリズム的性格は、現実の運動にきわめて入りにくいものであった、といえよう。ロシア革命の衝撃とプロレタリア革命の高い理念は、ハンガリアの現体制をくつがえすエネルギーにただちに転化しはしなかった。

だが、歴史の転換は突然、意外な出来事から生ずることがしばしばある。2月20日、「人民の声」編集部前で失業者がデモをおこない、カーロイ政府の社会民主党閣僚にかねらの要求を提示した。体制内化した社会民主主義者はゲバルトに恐れをいだし、警察の保護を要請した。ただちに、デモ隊と警察との間で戦闘が始まり、アナキスト兵士が4人の警官を殺害した。翌21日、社会民主党の同意を求めて、警察は公安秩序、暴動扇動の嫌疑で、ベーラ・クンをはじめ64名の共産主義者を逮捕し、共産党本部や党出版部にふみこんで、党員名簿をはじめ『<sup>グゼレス・ラジャー</sup>赤旗』や多数の宣伝文書を物的証拠として押収した。政府はこの一連の弾圧によって、事態は鎮静するものだと考えた。ちょうど、プロレ

10) Georg Lukács, *ibid.*, S. 4, 前掲邦訳, 15ページ。

タリア革命の始まる1ヶ月前の出来事であった<sup>11)</sup>。

だが、事態はそう単純に推移するものではない。このことあるをすでに予期していたペーラ・クンは、すでに18年12月にひそかに第2中央委員会を設置していて、第1執行部にいつでも取って代わる準備をととのえていた。2月24日には、党中央は再建され、機関紙も再刊されるにいたった。政府当局の思惑はすっかり外れてしまった。ルカーチはこの第2中央委員会のメンバーに任命されて、機関紙を主に担当していたのである。このことは、現実政治家としてのペーラ・クンの並々ならぬ能力を示すものである。

のみならず、政府権力の一翼を担っていた社会民主党多数派は、こともあろうに2月25日に死亡した警官の追悼大集会を開催したのに対決して、戦争中平和主義を貫ぬき、たえず社会民主党執行部を批判し続けてきた「旧ガリレイ主義者」たちは、むしろ社会民主党の裏切りと警察の横暴ぶりを糾弾し、直ちに共産主義者を釈放せよと要求した。「社会民主主義者はこの犯罪によって、かれらの過去にふさわしいことをやってのけた。……かれらはリープクネヒトとルクセンブルグを殺してしまった。……われわれは、あきらかに編集局前のデモンストレーションに加わっていなかった人々の釈放を要求する」<sup>12)</sup>と。こうした抗議活動は、けっして一回かぎりでは鎮静しはしなかった。むしろ、日がたつにつれていよいよ激化していった。3月に入るや、労働者は多数の工場を占拠し、農民はいくつかの州で穀倉を押収し、主要諸都市では行政権がつつぎに労働者評議会に委譲された。

ところで、こうした反抗はブルジョワ民主主義政権にむけられたというより、反労働者階級の態度をとった社会民主党執行部にむけられたものであった。3月15日には、急進党は選挙活動をボイコットし、農民は社会民主党の要求する穀物配分計画をサボタージュした。18日に鉄鋼労働者は、武力で投獄中の共産主義者を救出することを決議し、19日には、印刷・植字工組合は2日間のスト

11) Tökés, *ibid.*, p. 123.

12) Marta Tömöri, *Uj Vizeken Járók. A Galilei Kör Története* [History of the Galileo Circle], Budapest, 1960, pp. 269-270.

ライキをおこなった。こうした状況のなかで、すでに社会民主党左派と中間派は共産党とひそかに妥協しようとする画策をおこなった。右派ギャラミ Gara-mi とその一派は最後まで反共産主義の態度を貫いたが、多数の社会民主主義者は共産党との妥協やむなしとの方針に切りかえ、金属労働組合は旧サンジカリストたるイグナーチ・ボガル Ignác Bogár らをさしむけて、ペーラ・クンと交渉に当らせた。クンはただちに筆をとり、前文で、ブルジョワジーと妥協する日和見主義的部分を労働者運動から切ることによって、はじめてハンガリア労働運動の統一が可能であると強調し、十項目からなる「共産主義綱領」をボガルにつきつけたのである<sup>13)</sup>。

クンのこの綱領草案は、「労働者、兵士、農民評議会」を核とするプロレタリア独裁を骨子としていて、レーニンの『国家と革命』の構想を、ひいてはその基礎となっているマルクスのパリ・コミューン像にその根拠をおいていた。このことは、ハンガリア革命をレーテ独裁と規定している第3項から、ことに明らかとなるはずである。「いまや、ハンガリア革命は、その国民的段階から純プロレタリア革命つまり社会革命の時期への過渡的段階にある。だから、ハンガリアのプロレタリアートは以下の線に沿って行動しなければならない。議会的共和国ではなく、労働者・農民代表の集権的共和国を樹立すること。常備軍と警察を廃止し、プロレタリアートの階級的軍隊をそれにとって代えること。……官僚制を完全に廃止すること。評議会は立法機関であるとともに、執行機関であり、司法機関であること。あらゆる官吏は選挙されるべきこと。」みられるように、レーニンのもう一つの重要な要請であった党の強力な役割についてなんらふれられていないのが、特徴的であって、このことがやがてハンガリア・ソヴィエト共和国の性格と運命を規定することにもなるのである。

すでに、この3月の政治的段階は、ブルジョワ革命初期のハンガリアの状況とは決定的に違っていた。社会民主党の右派をのぞけば、クンフィ、ガルバ

13) Tökés, *ibid.*, p. 130-1. この「共産主義綱領」については、Béla Szántó, *Klassenkämpfe und die Diktatur des Proletariats in Ungarn*, 1920, S. 44-6. を参照。

イ、ベーム、ヴェトナーなど左派・中央派の指導者たちは、このクンの提起した「共産主義綱領」を受諾せざるをえない、と判断した。このことを決定づけたのは、外国からの衝撃であった。3月19日、カーロイ伯は、ロシア赤軍がルーマニアとの国境を突破して、ハンガリア東部に進撃するのは、ほんの数週間の問題だとの報告を受けとった。と同時に、連合国側からは東部国境地帯に中立地帯を作り、新しい境界線にまで撤兵せよとの最後通牒をつきつけられた。政府は両勢力の板ばさみにあって、ここに進退きわまった。翌朝ただちに、緊急閣議を開き、連合国側の最後通牒を拒否すると同時に、総辞職をおこなった。ひきつづき、社会民主党は緊急執行委員会を開いて、共産党との合同にふみきった。ガルバイはただちに、ブダペスト労働者評議会に実情を伝えて、その承認を求めた。翌21日に、ペーラ・クンをはじめ逮捕されていた共産主義者は釈放された。昨日までの囚人たちは、今日はれて、天下の支配者となっていたのである。

では、こうして成立したハンガリア・ソヴィエト共和国とは、どのような性格をもち、どのような結末を迎えるのだろうか。また、そのなかでルカーチはどのような思想をつくり上げるのか。私は以下の小論のなかで、ハンガリア共和国の変化のなかに、ルカーチの思想の動きを捉えたいと思う。

## II ハンガリア・ソヴィエト共和国

### ——階級意識の統合とプロレタリア独裁の道徳性——

「1919年3月21日は、ハンガリアのプロレタリアートの生涯においてのみならず、世界革命の発展のうえでも、歴史的な意義をもつ日である。簡潔にまとめると、こうである。革命そのものに先行し、革命をはじめて可能にした一つの事件が、つまり、ロシアでは一年半にも及ぶ困難な闘争ののち、プロレタリアートの同志討ちののち、やっと可能になった事件が、この日におこったのである。社会民主党が、かれらの行動の基盤として共産主義的・ボルシェヴィズムの綱領を無条件に受け入れたのである。……プロレタリアートの諸党派が団

結したという事実、プロレタリア諸階級の統一が党の統一となってあらわれたという事実、これのみが、戦闘も流血もなしに権力をプロレタリアートの手に獲得させたのであった。プロレタリアートがこの権力を行使し、それを自らの目標にかなった社会の建設のために役立てることができるということも、最近数日間の一連の事件が、火をみるよりも明らかに証明してみせた。それらの事件は同時にまた、この統一が、同志討ちのさなかにあったロシアの労働者階級が革命の間になしえたよりも、さらに急速で、さらに決然たる行動を、ハンガリアのプロレタリアートに可能ならしめた、ということをも示している。<sup>14)</sup>

以上の文章は、プロレタリア革命直後にルカーチが『戦術と倫理』のなかでもらした所感の一節である。翌22日、社会民主党から17人、共産党から14人、ノンセクトから2人、合計33人の人民委員が革命政府委員会を組織し、ハンガリア・ソヴィエト共和国はここに発足することとなった<sup>15)</sup>。新政府の公報委員たることを自任していたルカーチの上の所感は、単にルカーチの個人的見解というよりは、革命生誕の感激にひたっていた多くの革命家たちの共通のものであった、といえるだろう。3月28日付の『<sup>ヴェレス・ウジャーク</sup>赤旗』は、『共産党宣言』へのマルクスの「ロシア語版への序文」を典拠として、「マルクスが1870年代のロシアにおいて土地共有制の急増によって、急速に社会主義への発展にむかう可能性をみとめているのなら、同じことが40年後のハンガリアにいっそうよくあてはまるにちがいない」と言明し、ハンガリア革命の客観的根拠を示そうとした<sup>16)</sup>。のみならず、ブルジョワジーを完全に排除し、無血でプロレタリアートの統一をかちとったことをみてとり、社会民主主義者もベーラ・クンも、ハンガリアのプロレタリアートはロシアのばあいよりはるかに階級意識の強いものと考え、すでにハンガリアはロシアより前進しているものと評価した。とともに、新生ソヴィエト共和国の政治が、「プロレタリア国家の立法・行政・司法

14) Georg Lukács, Taktik und Ethik, in *Schriften zur Ideologie und Politik*, S. 30, 池田浩士, 前掲訳, 47-8 ページ。

15) Tökes, *ibid.*, p. 137.

16) "Are We ready for Communism?", *Vörös Ujság*, March 28, 1919.

権力の結合体の担い手としての、労働者、兵士、貧農ソヴィエト体制におかれることになった」<sup>17)</sup>のために、ことにベーラ・クンはハンガリアの労働者が自己のモデルであったロシア・プロレタリアートより秀れたものと錯覚さえしたのであった。

こうした事態をもっとも楽観主義的に受けとり、さらにハンガリア革命を世界革命のモデルたらしめようとしたのは、当のルカーチその人であった。おなじく『戦術と倫理』を、ルカーチはつぎのようにしめくくっている。「プロレタリアートの運動は、最終的に、一つの新しい段階に足をふみいれた。つまり、自ら権力を握る段階に。ハンガリアのプロレタリアートのおどろくべき行為は、かれが世界革命を最終的にこの段階に導きいれた、という点にある。ロシア革命は、プロレタリアートが権力を奪取し、新しい社会を組織することが可能であることを示した。ハンガリア革命は、この革命がプロレタリアートの同志討ちをへずとも可能であることを示した。これによって世界革命は、いっそう進んだ発展段階に達したのだ。この指導的な役割を担うための、つまり自らの指導者たちと万国のプロレタリアとを先導するための力を、自分のなかから創造しえたということは、ハンガリアのプロレタリアートの名誉となるであろう。」<sup>18)</sup>

当のハンガリア人たらずとも、ヨーロッパ人であるなら、ロシア革命の成功について、3月のハンガリア・ソヴィエト共和国の生誕はヨーロッパの新生だと感じとられたであろう。だが、こうした楽観主義的ムードに対して、革命の母国ロシアの共産主義者たち、ことにレーニンはどうみていたであろうか。ちょうど、3月18日から23日まで6日間、「ロシア共産党第8回大会」が開かれていたなかでレーニンはハンガリア革命のニュースを受けとり、直ちに大会の名で「ハンガリア・ソヴィエト共和国政府」(3月22日付)に祝電を送っている。そのときには、レーニンもまた、ハンガリア革命を契機に「全世界で共産主義

17) *Temporary Constitution of the Hungarian Soviet Republic*, April 3, 1919.

18) Lukács, *Taktik und Ethik*, S. 40, 前掲邦訳, 59ページ。

が勝利スルコトが遠クナイコト也」確信していた<sup>19)</sup>。だが、翌23日にベーラ・クンに個人的に打電して、社会民主党と共産党との安易な合同を戒しめて次のようにのべている。「ハンガリアノ新政府ガ実際ニ共産主義政府デアッテ、単ナル社会主義者、スナワチ裏切り社会主義者ノ政府デワナイトイウコトニツイテ、アナタワドウイウ現実ノ保障オモッテイラレルノカ、オ知ラセオウ。共産主義者ワ政府内デ多数オ占メテイルノダロウカ？ イツ、ソビエト大会ヲ開カレルノカ？ プロレタリアートノ独裁オ社会主義者ガ認メテイルトイウコトワ、現実ニドウイウ点ニアラワレテイルノカ？」<sup>20)</sup>

レーニンのこの疑懼は、まさに凶星だった。両党は統一したとはいっても、革命政府委員会の構成メンバー33人中、共産党員は半数にはほど遠い14人でしかなく、正式の政府正人民委員は旧社会民主党員で、旧共産党員は副人民委員でしかなかった。たとえば、教育人民委員は社会民主党出身のジェクモント・クンフィ Zsigmond Kunfi (1879-1927) で、ルカーチはその下に仕える副人民委員にしかすぎなかった<sup>21)</sup>。それにしても、当時のハンガリア人民の両党に対する支持率からみれば、こうした共産党の劣勢はあきらかであるばかりではなく、むしろ実勢より、この政府構成は共産党にとってかなり有利なものであった。たとえば、10地区評議会から選ばれるブダペスト労働者・兵士代表者評議会メンバー64人のうち、社会民主主義者は46人で、共産主義者はわずかその半数にもみたぬ18人であったし、ブダペストのプロレタリアートの最高政策決定委員会=80人執行委員会の常任幹部会の比率は、社会主義者4人と共産主義者1人(イシュトヴァン・ビールマン)であった<sup>22)</sup>。だから、新しい党の統合とはいっても、対等な合併ではなく、社会民主党優位のそれであった。つまり、ハンガリア共産党はプロレタリア政権のなかでは、ボルシェヴィキでなく、メン

19) 『ロシア共産党第8回大会』1919年3月18—23日、の「5、ハンガリア・ソヴィエト共和国政府へ大会を代表して送った祝賀の無線電報、3月22日」、『レーニン全集』第29巻、188ページ。

20) 『ベーラ・クンへの無線電報の控え』1919年3月23日、『レーニン全集』第29巻、219ページ。

21) G. H. R. Parkinson (ed.), *Georg Lukács, The Man, his Work and his Ideas*, London and Reading, 1970, p. 7, 平井俊彦監訳『ルカーチの思想と行動』9ページ。

22) Tóké, *ibid.*, p. 161. 共産党系機関誌『Vörös Újság』は80人委員会を soviet と呼び、社会民主党系機関誌 *Népszava* はこれを council と呼んだ。

シェヴィキだったのである。

もとより、この新しいプロレタリアートの政權たる革命政府委員会が革命当初からおちいった困難は、それだけにとどまらなかった。まず第一に、プロレタリア革命が相対立せる革命ロシアと連合国のうち、ロシアとの連帯を選んだことによって成立した事情からみて、当初からたえず連合国の反革命軍の圧力を受けていた。すでに、4月17日にルーマニア軍が進撃してきた。こうした情勢のなかで、ハンガリア新政府は強力な人民軍を早急に樹立すべきであったにもかかわらず、軍事人民委員ボガーニの人民軍構想——非プロレタリア的兵士を解雇して、労働者・貧農によるハンガリア赤軍の設立——は、わずか5千人の正規兵を集めたにすぎず、圧倒的な勢力をもつルーマニア軍の前に抗すべくもなかった<sup>23)</sup>。第二には、敗戦からブルジョワ革命、さらにプロレタリア革命へといたる動乱期がもたらした経済的窮迫であった。評議会政府は旧社会民主党員イエネ・ヴァルガと旧技術家社会主義者ギュラ・ヘヴェシらを中心に、社会主義経済政策を企図し戦後経済再建計画を樹立したが<sup>24)</sup>、その実行ははかばかしくなかった。国民の経済生活は6月にはいよいよ底をついてきた。ラディスラウス・ビゾニは『ハンガリア・ボルシェヴィズムの133日』(1920年)のなかで、この事情をありのままに次のように描いている。首都ブダペストでは、これまで家畜の飼料だった塩詰けキャベツ・大麦・きびが主食となった。それでさえ手に入れることが容易でなく、食堂の大部分は閉鎖され、なお開店しているごく僅かな食堂のまえには、長い列ができた。家庭をあずかる主婦たちは、白布や衣類をもって農村へ買出しにでかけねばならなかったし、また、食料品店の前では早朝3時から行列しなければ、食事にありつけない始末だっ

23) Tótkés, *ibid.*, p. 157-8.

24) いうまでもなく、社会主義経済計画の基本は、広汎な経済体制の社会化であって、社会化の範囲は、20名以上の労働者を雇用する工場と作業場、非自営の土地、銀行など貯蓄機関、卸売業、鉄道など運輸機関などはもとより、アパート、劇場、映画館、浴場などにも及んでいた。こうした産業および土地の社会化の目的は、生産の継続性を保証し、都市プロレタリアートに食糧を確保することにあった。(Tótkés, *ibid.*, p. 141-2) このばあい、ハンガリア革命政府が農村より都市プロレタリアートの利害を重視したために、反農民的性格をもつものであったと、テケーシュは指摘している。

た。こうした食糧戦争はブルジョワジーにもプロレタリアにも同様におそいかり、「おそかれ早かれ、労働者階級をすらソヴィエト政府に敵対させたのは、飢餓であった。」<sup>25)</sup>

こうした国際的環境や国民生活の至難な事態にたいして、革命政府は適切な施策をうちたて、強力に実行に移す必要があった。ペーラ・クンは革命当初から、ロシア・ボルシェヴィキとは反対に、国家行政権力のなかで党の役割を重視せず、もっぱら政治の最高決定機関を革命政府委員会にゆだねようとした<sup>26)</sup>。というのも、プロレタリアートの自発的組織である労働者・兵士・貧農代表評議会と革命政府の結合を意図したためかもしれない。ルカーチが労働者評議会をとりあげ、この制度のなかにプロレタリア革命の担い手をみたのは、ハンガリア・ソヴィエト共和国崩壊後に書いた『階級意識』のなかである<sup>27)</sup>。だが、すでにルカーチは、党と階級との関係については、党をプロレタリア階級運動の過渡期の必然的現象としてとらえ、やがて消失していくものと論じている。「党がかかえる内的な矛盾は、誤謬の結果というよりはむしろ、内的な、弁証法的な矛盾とみなされなければならない。階級社会を滅ぼすことは、プロレタリアートの歴史的使命である。ところが、この課題を遂行するための唯一の可能性は、最下層にある階級としてのプロレタリアートが過渡的に支配階級となることだけである。」<sup>28)</sup> こうしたプロレタリア階級運動を重視するルカーチの考え方を、21年の論文『マルクス主義者、ローザ・ルクセンブルク』における「民主主義的独裁」の概念に結びつくとして評価するのは、ペーター・ルッツであり<sup>29)</sup>、これをサボー・グループやガリレイ主義者と共通する立場、すなわち、

25) Ladislaus Bizony, *133 Tage ungarischer Bolschewismus, Die Herrschaft Béla Kuns und Tibor Szamuelys / Die blutigen Ereignisse in Ungarn*, Leipzig und Wien, 1920, S. 104. この論文は、反動的な立場から書かれたものだが、事実記録をかなり詳細につたえている。

26) Tökés, *ibid.*, p. 140.

27) Lukács, *Geschichte und Klassenbewusstsein*, S. 347-8, 平井訳『歴史と階級意識』, 未来社 93ページ。

28) Lukács, *Taktik und Ethik*, in *Schriften zur Ideologie und Politik*, S. 35, 池田浩士訳『ルカーチ初期著作集, 政治編1』52ページ。

29) Peter Ludz, *Der Begriff der »demokratischen Diktatur« in der politischen Philosophie*

共産党右派グループと位置づけるのは、テケーシュである。テケーシュは党の合同に反対したヨーゼフ・レーヴァイや極左派サムエリーに対決させて、ルカーチ・グループを反党官僚主義的と位置づける。「ルカーチやエルヴィン・シンコー Ervin Sinkó その他いく人かの若手コミュニスト・インテリゲンチャーは、〈党形式〉を解消すれば、組織的な階級的テロもなくなるものと考えた」<sup>30)</sup>と。こうした視点からみれば、この時期のルカーチは少なくとも反党官僚の性格をもっていたといえるであろう。

ところで、ハンガリア・ソヴィエト共和国のもっとも重要な局面、すなわちプロレタリア独裁の問題とそれについてのルカーチの態度にふれねばならない。このことによって、革命過程におけるルカーチのもう一つの側面を明らかにできるからである。

すでにふれたように、ハンガリア革命の挫折の原因は、階級的立場や史観によってさまざまに評価されている。ビゾニイによれば、国際的反動体制の軍事的圧力と国内の生活物資の窮迫に帰せられるし、革命左派エルヴィン・サーントーの『ハンガリアにおける階級闘争とプロレタリア独裁』（1920年）によれば、社会民主党と共産党の合作になる革命政府内部における社会民主党の裏切りに帰せられよう<sup>31)</sup>。事実、国際的情況や国内問題の諸矛盾は、6月12日から開催された「ハンガリア社会主義党」第1回大会のなかで集中的にあらわれた。端的に言えば、「プロレタリア独裁」をめぐる評価の問題であり、これについて会議は社会民主主義者とコミュニストとの間で決裂した。すでに、この問題をめぐる両派の対立は、大会の直前、社会民主主義機関紙『人民の声』のヤコブ・ヴェルトナー Jakob Weltner と、共産主義機関紙『<sup>ヴェレンス・ウジヤーク</sup>赤旗』のラースロー・ルダシュとの論争にあらわれていたが、大会の最中、ジュクモント・クン

von Georg Lukács, in *Schriften zur Ideologie und Politik*, S. XLII, すでに『戦術と倫理』のなかで、ルカーチは党と階級を〈弁証法的対立〉として捉えており、〈社会のなかで支配する階級としての統一のプロレタリアート〉という〈より高次の統体〉のなかで止揚される対立として捉えている。この考え方は、『歴史と階級意識』にもあらわれている。

30) Tökés, *ibid.*, p. 153.

31) Béla Szántó, *Klassenkämpfe und die Diktatur des Proletariats in Ungarn*, Wien, 1920, S. 63.

フィとペーラ・クンとの論争でその頂点に達したのである。というのも、共和国成立当初からすでに始まっていた党内権力闘争の結末が、この大会に集約されることになったからである。

この第1回会議で、新党はその綱領と名称を決定することになっていた。ペーラ・クンには、たとえ党内勢力は少数派であっても、社会民主主義者に革命前の「共産主義綱領」をのませたという自負があったのに対して、ジュクモント・クンフィには党内多数派であり、極左的傾向がハンガリア革命を挫折においやることになるという現実的危機感があった。クンはソヴィエト共和国に不可欠なものは、ブルジョワ的要素を一切排除した「プロレタリア独裁」であることを強調して、次のようにいう。「プロレタリアートの独裁は、少数者の独裁ではなくて、〈一般的に受動的な〉労働者階級全体のための〈活動的な少数者〉の独裁である。ブルジョワ的反対ははっきりみられないにもかかわらず、社会主義への過渡期において〈独裁の特質〉はひとしく適用されねばならない。勝利せるプロレタリアートは、残存せる古い資本家や新しく生まれたプロレタリアートの官僚主義のために脅やかされているけれども、これらをただちに新しい国家行政の誤りだと非難してはならない。赤軍はずっと純プロレタリア的組織たるべきである。さもなければ、武装せるブルジョワジーの反革命の危険が生まれるであろう」<sup>32)</sup>と。

こうしたコミュニスト側からの「プロレタリア独裁」の提案にたいし、社会民主党きっての理論家であり、革命政府の教育人民委員ジュクモント・クンフィは、まっこうから反論して、次のようにいう。「もし、われわれが現在の独裁の方法を用い続けるならば、……プロレタリアートの没落に導くことになるだろう。」クンフィは、敵対的な資本主義諸国家のまっただ中でハンガリアが不安定な状態におかれているという事実をふまえて、「国内の反革命の発展を阻止するために、〈プロレタリア独裁の暫定綱領〉を合理的に適用する」ことを要求した<sup>33)</sup>。ことに、クンフィは文化や芸術の領域にプロレタリア独裁をお

32) Tökés, *ibid.*, p. 178.

こなうことを厳しく批判した。「学問、文学、芸術の発展は、自由な雰囲気なしに考えられない、と私はいいたい。ここ10週間のプロレタリア独裁の間に、われわれは文学・芸術に貢献した余りにも多くの人々が恐怖におとし入れられたことを、見てきた。たとえ、活動的な革命的な少数派の旗の下でおこなわれるとしても、多数の組織労働者に反するいかなる政策をもゆるすわけにはいかない」と<sup>33)</sup>。最後に、クンフィはレーニンの名の下にプロレタリア独裁をおこなうことは、やがて組織労働者の統一を失うから、ロシア・ボルシェヴィキの模倣を止めよと提案したのである。

このクンとクンフィの代表討論に続いて、活潑な討論が相互から戦わされた。「プロレタリア独裁」に関するコミュニスト側の主張をのべれば、次のようである。ラースロー・ルダシュは、「ヨーロッパ各地に世界革命が拡がるまで、プロレタリア独裁は絶対に強化さるべきだ」とのべ、デゾ・ボカーニは、「労働組合が自己の経済的・行政的義務をになうことに失敗したからには、プロレタリア独裁をどうしても維持すべきだ」と主張した。さらにゲオルク・ルカーチは、「われわれの(ソヴィエト共和国)制度を全人民に合致させるために、警戒をゆるめてはならない。……もし、警戒をゆるめるなら、反革命を生み出すことになろう」と力説し、マーチュアス・ラーコシは、「階級闘争においては、中立的立場はありえない……だから、いかなる譲歩も弱みと解釈されるであろう」と弁じた。そしてだめを押すかのように、イシュトヴァーン・ヴィールマンは、次のように断固たる独裁の必要性を強調する。「流血を阻止する唯一の方法は、断固として独裁を実行することであり、これによってプロレタリア支配への反逆を不可能たらしめる。……さもなければ、プロレタリアートは敗北するであろう」と<sup>35)</sup>。

クンフィをはじめ、社会民主主義者ヴィルモス・ベューム、モール・エルデ

33) Tóké, *ibid.*, p. 178-9.

34) 文化・芸術問題に関するプロレタリア独裁にたいするクンフィの抗議は、社会民主主義著作家グループの支持を受けた。この間の事情については、Tóké, *ibid.*, p. 179 を参照。

35) Tóké, *ibid.*, p. 180.

リイ、ペーター・アーゴステンたちは、プロレタリア独裁に失望し、革命が退潮しつつあるを知って政府の要職を辞任した。ルカーチがクンフィの辞任で、教育正人民委員となったのは、この時期であった。たしかに、一面ではルカーチは極左派テロリスト、ティボル・サムエリを心から軽蔑し、ブルジョワジーを人質にとることに抗議し、党による専制を戒め、労働者階級の自発的な連帯性を確信してはいた。だが、他面ではこと「プロレタリア独裁」となると、完全に社会民主主義者と対決した。クンフィ教育人民委員の支配下にあった時期から、すでに共和国のプロレタリア教育政策と文化政策に関する実権は、完全にルカーチがにぎっていて、この分野における「プロレタリア独裁」を実行に移そうとしていた。これにたいし、「クンフィは革命における経済的・政治的強制のまともな実行には同意しながらも、文化および芸術における強圧にはきわめて鋭い党派的な不満を示した。かれはこの〈文化上の専制君主〉の名をあげなかったが、それがルカーチであったことは明白であった。」<sup>36)</sup>

この時期においてルカーチが教育・文化政策で「プロレタリア独裁」を主張したことの歴史的評価をここで簡単に下すわけにはいかない。それは、ハンガリアのおかれていた国際的状況や国内の階級闘争のなかで、もっと立ちいって考察しなければならない。ここでは、どのような視角からルカーチが「プロレタリア独裁」を捉え、また、これをとおしてハンガリア革命をどう理解していたかを明らかにしておこう。このばあい、共和国の過程に書いた2つの論文、すなわち、6月のブダペスト史的唯物論研究所開設にあたっておこなわれた講演『史的唯物論の機能変化』、および同じくこのころに書いたと推定される『共産主義生産における道德の役割』であろう。これら二つのうち、「精神家たち」から転進したルカーチの面目をあざやかに示しているのは、分量としては短い、内容の豊かな後者である。

すでにのべたように、ハンガリア・コムニストたちの「プロレタリア独裁」論のモデルは、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』であり、『フラン

36) Tökés, *ibid.*, p. 179.

スの内乱』であった。そこでは、プロレタリア独裁によって、ブルジョワの生産関係を廃止するとともに、階級対立一般も消滅するはずである。ルカーチもまた、これにならって次のようにいう。「プロレタリア独裁の徹底的な遂行は、プロレタリア民主主義が独裁を吸収し、不必要にすることによってのみ、終りを告げることができる。もはやいかなる階級も存在しなくなったのちには、誰にたいしても独裁を行使するわけにはいかない。」だが、ルカーチに特有な考え方は、〈プロレタリア独裁〉の在り方を、道徳的側面と制度的側面に区別し、前者の後者に対する優位性を強調している点にある。だから、ルカーチにとって〈プロレタリア独裁〉とはなんら制度的な問題ではなく、自己の内面にむかうのであって、個人主義的ブルジョワジーの道徳からプロレタリアートに固有の階級的連帯性＝自発性への変革が要請されることとなるのである。「労働規律の問題は、たんにプロレタリアートの経済上の死活問題であるばかりか、道徳上の死活問題でもあるのだ。……社会の発展がどの方向を辿るかは、一にプロレタリアートの自己意識にかかっている。かれらの精神的ならびに道徳的实体に、判断力と犠牲的態度にかかっているのである」と<sup>37)</sup>。

### III ハンガリア革命のエピローグ

#### ——階級意識の分裂性と物象化——

ソヴィエト政府内部で激しい権力闘争が戦わされている間に、国民生活の窮迫がいよいよ増大していった。7月に入るや、労働者や主婦達のデモは連日続いた。「我々にパンをよこせ！サムエリのために、飢えるつもりはないのだ！生活物資を調達できないのなら、くたばってしまえ！」と、口々に叫んだ<sup>38)</sup>。だが、政府は地方から生活物資を調達できず、なんの有効な対策もとれなかった。事情は刻々と悪化していった。多数の労働者は革命政府に公然と反対し、労働者評議会内部から政府要人の辞職を要求し、社会民主主義者に権力を

37) Lukács, Die Rolle der Moral in der kommunistischen Produktion, in *Schriften zur Ideologie und Politik*, S. 80, 前掲邦訳, 76ページ。

38) Ladislav Bizoný, *133 Tage ungarischer Bolschewismus*, 1920, S. 105.

渡せという声が強まっていた。ブダペストの街や評議会は、きわめて陰悪な空気につつまれていた。のみならず、革命政府成立後まもない4月から、すでにルーマニア軍からの攻撃をしばしば受けてきたが、強力であるべきであった。ハンガリア赤軍は、現実には勢力が弱く、士気も揚がらず、やうやくクンの軍事交渉によって難をまぬがれてきた。ついに、6月20日に、ルーマニア軍はタイス河を渡り、ブダペスト攻略をはかった。7月25日には首部の近傍は敗走してきた兵士であふれ、赤軍司令は革命政府に、もはや戦争を続行できないことを表明した。「我々は平和を望む！平和がほしいのだ！」ブダペストの街は極度にアナーキヤな状況となった<sup>39)</sup>。8月1日、ルーマニア軍は首都まで30キロの地点に迫った。クンは労働者評議会にあらわれて、ついにハンガリア・ソヴィエト共和国の崩壊を宣言したのである。

ベーラ・クンはただちにオーストリアへ亡命した。ルカーチは地下運動を組織するために、しばらくハンガリアにとどまっていたが、9月にはウィーンに亡命した。ホルティ反動政権のもとで、5千人にのぼる男女が処刑され、7万5千人が投獄され、10万人以上が各国に亡命した。ボルシェヴィズムのみならず、民主主義や自由主義もひとしく弾圧され、ハンガリア・ソヴィエト共和国の崩壊は、同時にブルジョワ民主主義の挫折でもあった。再び、専制主義的「前ファシズム」反動体制に帰っていったのである。国外に逃れたボルシェヴィキたちは、外国で結集して、ハンガリア革命挫折の原因を検討しはじめた。この論争をめぐる、亡命ボルシェヴィキは、クン派とランドラー派に分裂したのである<sup>40)</sup>。

39) Ladislaus Bizony, *ibid.*, S. 106.

40) Tökés, *ibid.*, p. 214-5. ベーラ・クン派に属したのは、Jenő Varga, Endre Rudnyánsky (モスクワでのハンガリア・ソヴィエト代表), Béla Vágó, Mátyás Rákosi であり、ランドラー派には、Ernő Bettelheim, Henrik Guttman, Béla Szántó, László Rudas であった。ルカーチがこの派に属したのは、おそらくしばらく後のことであろう。ランドラー派は、クンが腐敗せる独裁的方法を用い、社会民主主義者との無原則な合同を行い、新党会議後のコミュニストの党再建を怠った……として、革命挫折の原因をクンの個人的責任に帰したのに対し、クン派は、①社会民主主義者との適切な保証のない合同の結果、党の組織的・イデオロギー的統一性が失われたこと、②農村・農民政策の失敗、③中産階級・ブルジョワジーの協力を求めなかったために、国民的規模でプロレタリア共和国を防衛できなかったこと、④産業・商業上の社会化の行き

では、革命挫折後にルカーチは思想的变化をとげたのだろうか。ベーラ・サントーと同じくルカーチもまた、「プロレタリアート独裁」の正しさを確信して、社会民主党の裏切りが挫折の根本的原因であることを確信していた。このことは、亡命地ウィーンで19年から20年にかけて執筆した『階級意識』のなかで、きわめて明白にあらわれている。ルカーチに特有な考え方は、ハンガリア革命の挫折を外因的原因によるよりも、むしろプロレタリアートの階級意識の分裂性に求めたといえるであろう。『戦術と倫理』では、ブルジョワジーとプロレタリアートとの歴史的役割の相違に焦点がおかれたが、『階級意識』では、両者の対立がプロレタリアートの階級意識の構造のなかに映し出されることとなった。もはや、個別性と全体性は、ブルジョワジーとプロレタリアートの階級的相連ではなく、プロレタリアートの階級意識そのものの対立である。「なぜ階級意識がこのように自己の道をふみはずすのかといえば、その根拠は、個々の目的設定と究極目的との弁証法的分裂のなかに、したがって結局プロレタリア革命の弁証法的分裂のなかに、求められるのである。」<sup>41)</sup>とともに、このことによってはじめ、プロレタリア階級意識のなかの認識論的課題が生まれてきたのである。

だが、ルカーチの階級意識論の特質は、きわめて弁証法的である。ルカーチはプロレタリア革命の挫折のなかで、プロレタリアートの階級意識を分裂し、物象化したものとして観照し静観していたわけではない。この点では、どこまでも革命当初から持ち続けていたプロレタリアートへの確信に支えられていた。「ほんとうの実践的な階級意識の強さと優越性はどこにあるかといえば、それは経済過程が分裂しているという徴候をしめしているうしろに、実は社会の全体的発展としてそれは統一しているのだとみとめる能力を、プロレタリアートの階級意識はもっているのだ、という点にある。」こうした確信が、あるいは

すぎと生産の連続性の失敗、およびプロレタリアートと赤軍への食糧確保の失敗、⑤オーストリアにおけるプロレタリア革命の失敗など、国際的な革命運動の退潮、およびソヴィエト・ロシアからの軍事援助の欠如を、あげたのである。(Tökés, *ibid.*, p. 215-6.)

41) Lukács, *Geschichte und Klassenbewusstsein*, S. 53, 平井訳, 331ページ。

革命的左翼派であったランドラー派にルカーチを引きよせたのかもしれない。だが、すでに指摘したように、こうした確信は革命初期のような素朴なオブティミズムに色どられたものではなく、プロレタリア階級意識の内的構造の分析を、客観的・歴史的段階に照応させて、すすめて、「現実の労働者階級の意識状態」と「プロレタリアートの真の階級意識」または当為としての階級意識との距離を明白に自覚したことは、革命後のルカーチの大きい問題意識の転換であり、これが他の『歴史と階級意識』の諸論文の基調につながるものではなかったか。